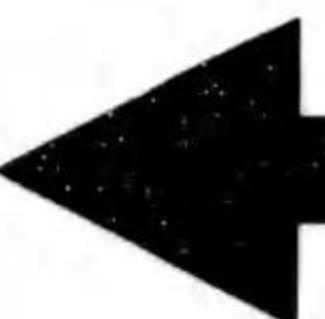




始





43100  
417

大正  
3. 10. 20  
内交

朝 ぼ ら け  
のこんの夢のさめやらぬ  
心おかるゝ家あとに  
昨日も今日も明日もまた  
同じ道筋テクテクご  
色香あせたる紫包み  
後生大事に抱えこみ  
ひとの榮華よそにして  
脇目もふらず急ぎ足  
アレ人の親腰辨黨



鈴の習作



満員こみあふ割引電車  
人の鈴なりぶらさがり  
げに目白おしの窮屈さ  
紳士の禮もへちまの皮  
先客様をつきやりて  
おしのけくらる早業は  
ソンジョそちらにすまし給ふ  
金縁眼鏡のハイカラも  
八字ヒゲの先生も  
おばえなしとは云ひ得まじ

朝な朝なの關守は  
出勤簿のかゝりなり  
たれが捺しても寸法に  
かはりのあるべき筈なきに  
印形ベタベタお茶濁す  
これも仕事の一つにて  
馬鹿げきつた譯なれど  
一分ちがひにピクピクと  
冷汗ながす藝當は  
はたから見れば笑止ならん



噫奈何共  
匣余之手



男と生れしその甲斐に  
何とかしても一かざの  
名をあげたきは山々の  
おもひに任せぬ身の不運  
たれをうらみん籠の鳥  
あがく羽音のいちらしや  
わが兒の出世夢に見て  
遠くはなれし故郷に  
老を養ふ親たちの  
知らぬが佛か極樂か

都の空はすゝぐもり  
紅塵、百尺渦をまき  
車馬絡騒のそのなかを  
せわしく駆けるタキシーは  
腰辨づれに縁遠く  
親のゆづりの膝栗毛  
指をくわへて見おくれば  
あらにくらしや殘念や  
眞向正面ガソリンの  
臭ひをあびて咽せにけり

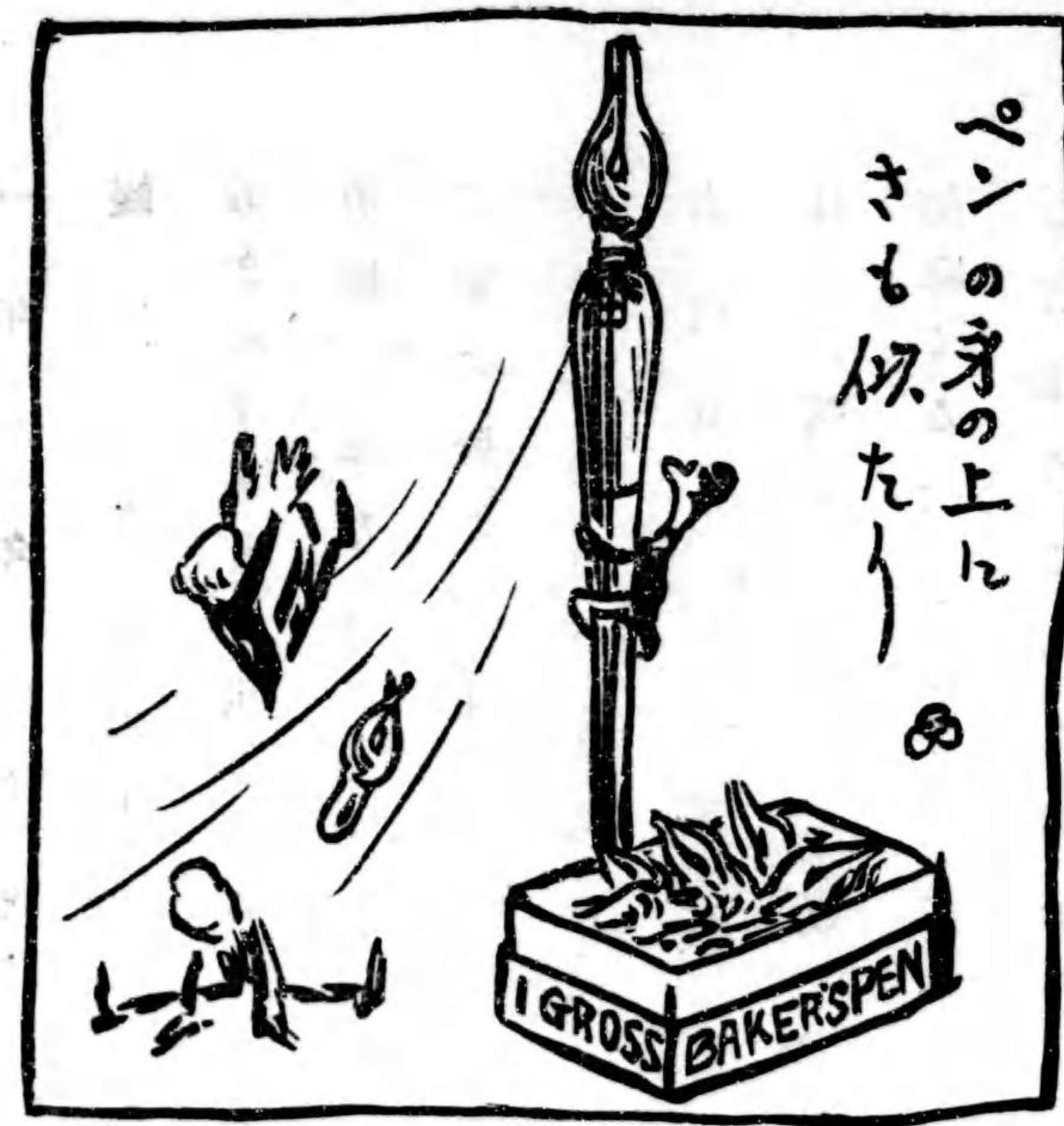


ひ臭のシリソガ

一年二年三年や  
巻のばかりに追々と  
あき椅子あと釜狙ひこみ  
辛抱辛氣なうきつとめ  
二重の腰を三重にまげ  
盲従盲動ひたすらに  
上役共のヒゲ塵を  
はらひ落しておだて上げ  
胡麻することを得手となす  
乞食根性さもしけれ



身を削られて鰹節  
味をのこしてすてらるゝ  
さてコシベンの笠の臺  
こぎ使はれてその揚句  
何時けし飛んで仕舞ふやら  
難癖附いて扶持はなれ  
あはれはかなき身の上は  
狙に寝てやいば待つ  
鯉の心とひとつにて  
身も魂もそはぬなり



誰れに見せよとて紅おしろい  
おんなばかりと思ひきや  
腰辨黨のそのうちで  
若殿原の面々が  
伊達を競へるいでだちも  
月々くるしき遣り繰に  
シャツの破れをつなぎゆく  
一皮はげば骸骨の  
上を裝へる花見かな  
靴磨かざれば光なし



腰ベニケイ 〇



世辭で丸めて浮氣でこねる  
粹なつとめは女護の島  
それにひきかへこれはまた  
野暮の骨頂と申すべき  
帳面相手にゴ合算  
氣のつまる事おびたし  
尻たゝかるゝ馬車馬平  
三百六十有餘日  
考えて見るまでもなく  
自分のからだ幾日ぞ

ならぶ机のかすかすに  
陣取りかまふ唯かれも  
三人よせてどうやらに  
文珠はおろか一文の  
徳にもならぬ無駄ばなし  
給金手當の泣言か  
重役共のアラ探し  
樂屋落やら手前味噌  
ドンを合圖に開かるゝ  
ストーブ會議おもしろや



無駄

ばね



摘み喰ひするお三どん  
買ひ喰ひをやる小僧連  
人並はづれぬ薄給者  
少しなりとも餘計にと  
現在つごめてゐながらに  
鶴の目鷹の目氣をくばる  
首尾よくゆけばよけれども  
よくある奴であて外れ  
骨折損のくたびれ儲け  
蛇蜂とらず見苦るしゝ

國 古 け れ は 舊 跡 に  
旅 の あ は れ や 催 さ ん  
銀 行 會 社 商 店 の  
整 理 保 存 の 書 類 こ そ  
數 十 百 の 人 々 が  
永 き 月 日 の そ の う ち に  
汗 に ま み れ し 苦 し み の  
痕 を あ 里 あ 里 悔 は るゝ  
心 な き 紙 た ば の  
知 る や 知 ら ず や 世 々 の あ と



人なつき

の悪い

野良



尾をふる犬は菓子もらひ  
吠えつく犬はなぐらるゝ  
あたまをさげて諾々と  
身軽に働く上手もの  
さるをどこで覺へたか  
屁理屈ならべて口返答  
逆ふて見ねば氣のすまぬ  
損な氣性のかわりもの  
手あたり次第ぶつつかり  
はたの迷惑かぎりなし

金 番 倉 番 出 納 役

ひとに聞ゑはよけれども  
可わいそうにも内幕は  
帳尻合はず氣はいらつ  
一方ならぬ心配に  
夜の目も碌にねむられぬ  
因業至極な役目とて  
お守り同様はなさすに  
肌につけたる鍵こそは  
壽命ちじめの薬なれ



なくて七癖ひとびとの  
すきとこのみに別あれど  
月給とりのいき休め  
あれやこれやの口實に  
夜を更かしての交際も  
宴會歸りは二次會を  
蘭燈くらき四疊半  
二日酔の停電は  
身にしむ吐息四苦八苦  
月のおわりぞ慘めなる



あたら盛りを



鬼も十八蛇もはたち  
あたら出花のさかりをば  
横道ぞれの思案して  
色香にまよひ身を削り  
恒産つくるひまもなく  
分別顔の中老が  
その日ぐらしに迫まれて  
禪かつぎヨチヨチと  
まだ腰辨の浮き苦勞  
蓋し見上げたものでなし



タ  
ま  
ぐ  
れ  
いこひをつぐる鐘の音に  
家路を急そぐ五分前  
悠々然と上役が  
頬杖ついて事なげに  
かまひこまる、自烈つたさ  
よんごころなく仕舞ひたる  
仕事ボツボツ引きずり出し  
體裁つくり澁々と  
時間をつなぐせつなさよ

腰ベン

三十年



夢が浮世か浮世が夢か  
夢の浮橋たゞりつゝ  
あたら有爲の才抱き  
腰辨當やいくさせの  
すぎこしかたをかへりみて  
身の行末をおもひなば  
腸ちぎる心地あり  
口惜し涙ぞ止め度なき  
因縁づくか天運か  
笛になる身が火吹竹

學文ンバロソ  
—のそ  
辨 腰

大正三年十月十五日印刷  
大正三年十月十七日發行

定價金拾貳錢

作 者 山 口 龜 之 助

畫 者 兒 島 鄉 吉

發 行 者 千 代 浦 昌

中 屋 商 店

京橋區銀座二丁目九番地

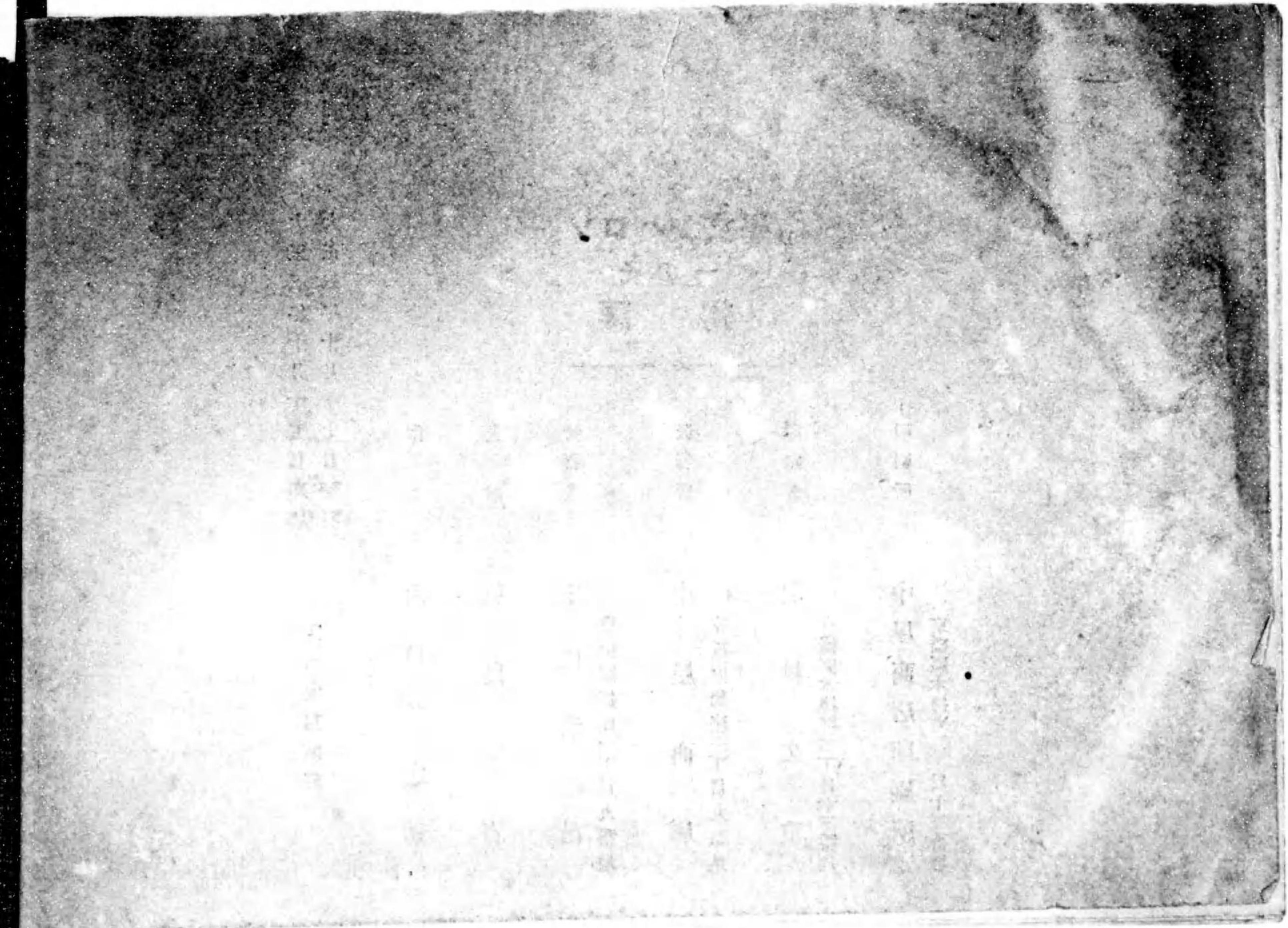
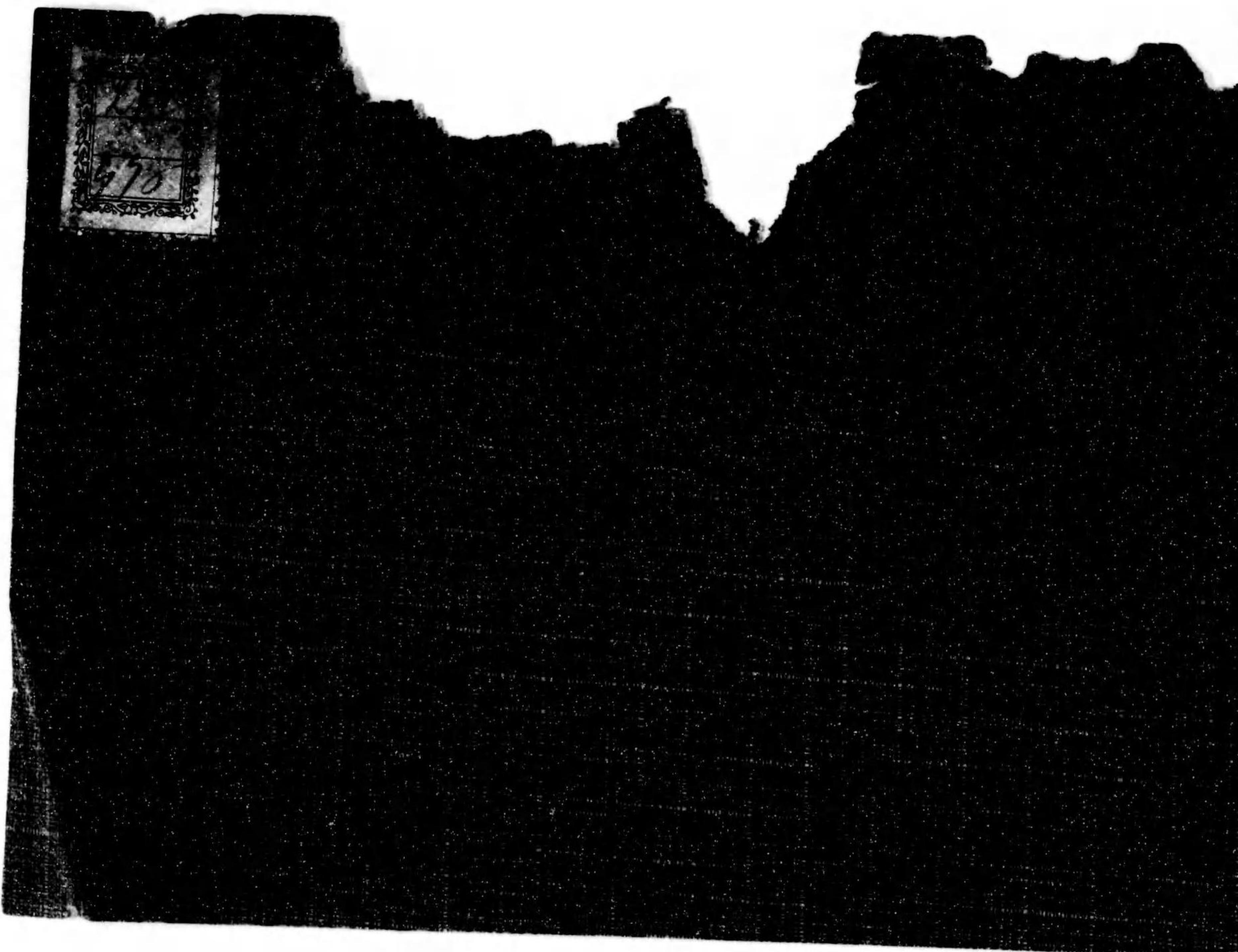
北 村 文 重

京橋區木挽町二丁目十三番地

中屋商店印刷所

京橋區木挽町二丁目十三番地

印 刷 所



終

